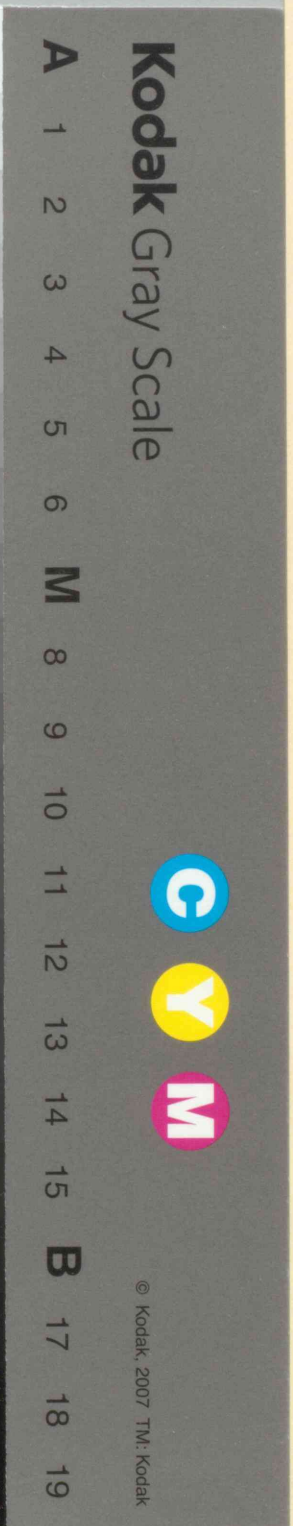
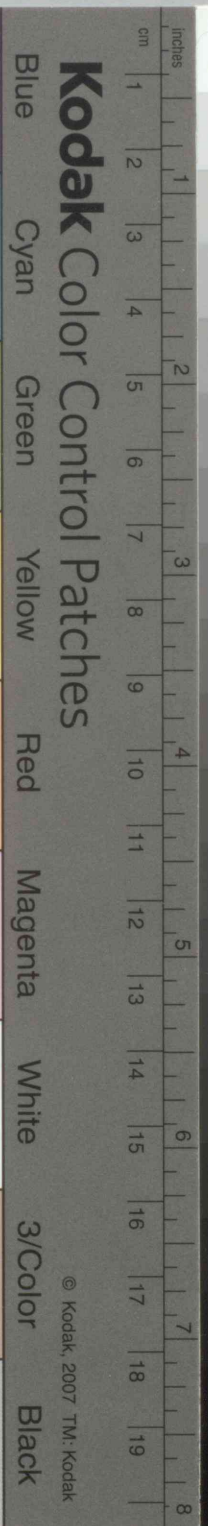


教科書文庫
4
810
44-1914
2000054284

實業
新日本讀本
高級用
卷二



43329
教科書文庫

4
810
44-1914
2000054284



資料書齋



教科書文庫
4
810
44-1914
2000054284

375.9
Roll

實業
新日本讀本 高級用 卷二

目次

一	理想	一
二	舊都の月	七
三	赤壁賦	二
四	床の秋風	三
五	百蟲譜	六
六	送安井仲平東遊序	三
七	漢詩三首	六
八	天海	二七

目次

六盟館編輯所編纂

實業新日本讀本

東京
合資
會社
六盟館

広島大学図書
2000054284

九	農界を思ふ	二九
一〇	言語	四一
一一	前出師表	四三
一二	霜の美	四七
一三	人生と四季	五一
一四	孟子三章	六一
一五	金色堂	六五
一六	藤田東湖の書簡	六九
一七	俚諺の内容	七六
一八	尺牘告白	八四
一九	故事熟語	八七

二〇	鉢の木 (一)	八七
二一	鉢の木 (二)	九五
二二	鉢の木 (三)	一〇二
二三	歸去來辭	一〇九
二四	我が國民の天職 (一)	一一〇
二五	我が國民の天職 (二)	一一六

高級用卷二目次終

實業新日本讀本 高級用卷二

一 理想

勇猛精進

高尚なる理想は一旦夕に成るものにあらず。諸君はすべからく其の志を遠大にし、徐々著々勇猛精進の力を積み、その大いなる奏功を未來に期すべし。一時の名聞のために輕舉して、諸君の理想を辱しむるなかれ。もしくは遽かにその理想を實行せんとして、不完全なる當世と衝突し、これがために失望し、これがためにひがみ、たまく、以て理想を傷つけ、また以て世を害ふが如き事を爲すなかれ。諸君は頗る

春秋に富めり、徐ろに大成せんことを期すべきなり。

されど歳華は人を待たず、白駒の隙を過ぐることは電よりも疾し、遙なりと思ひし將來は忽焉として諸君の眼前に迫り來らん。些子だに油斷せば、その理想は未だ萬分の一も成就せざるに、わが耳己に蟬鳴を聞き、わが鬢己に霜色を現ずるの悔あらん。明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものは、大いなる理想を實現せんとの大志あるものは、常に今日を限りなりとする覺悟なかるべからず。諸君よ、明日ありと思ふことなかれ。

然り。諸君は明日ありと思ふべからず。されど、されど、又明日ありと思はざるべからず。是明かに矛盾の箴誠なり。然れ

煩腦即菩提
平等即差別

ども、此の矛盾は其の語の逆なるにも拘はらず、その理の順なること彼の浮屠氏の所謂煩惱即菩提、平等即差別などいふ語に異なることなし。予や固より宇宙の祕密を談ずるほどの見識あるものにあらず。されど竊に思へらく「宇宙は矛盾の巢窟なり」と。不秩序なるが如くなれど、其の中に秩序あり。無常なれど、其の底に常住の大道存す。或はこれら無数なる矛盾の深意を會して、其の間に處して宜しきを得たらんもの、これを眞の人間と稱すべきか。

案ずるに、古來多數の失敗者は、或はこの矛盾の二語を結び著くる「されど」を會得する能はざりしものにて、其の少數の成功者、謂はゆる聖賢は、能くこの「されど」を會得したりし

因循踟躕

ものか。この一語の『されど』や、眞に天國と地獄との關門なり。門の左にも天國あり、門の右にも亦天國あり。然れども、その一に偏するものは墮獄す。明日ありと思はざるは一の天國なり。されど、明日ありと思ふも亦天國なり。嗚呼如何にせば可なるべき。因循踟躕してその中間にさまよはば、竟に無操無主義の徒となりて終らん。

諸君が理想は殆ど無限に高大なり。而して諸君が力量と時間とは有限なれば、理想の全分實現を眼前に望み難きは明瞭の理なり。これ諸君が理想の圓滿成就を永遠終世の事業、恐らくは子孫に遺傳すべき事業と爲さざるべからざる所以なり。されど全分は一分の積なり。無限は積まれたる有

圓滿成就

限なり。諸君もし力めて有限の力を積まずんば、たとひ天われに與ふるに無限の力量と無限の時間とを以てすとも、理想成就の日は來るべからず。諸君はすべからく片時も安心せずして理想の實現に従事し、今日は今日だけの全力を傾け、明日は明日だけの全力を傾けて、其の理想に盡忠すべし。蓋し、理想の全分成就は無限の時間と努力とを要すべけれど、その幾分の實現は、一日、一時、一念、一刹那の間にも成るべし。人生は無常なり、明日あるを必ずべからず。

それ明日は未得の寶なり。今日は既得の寶なり。諸君は既得の寶を利用して、日々、時々、念々、刹那々々、全力を理想の幾分成就に盡さざるべからず。然らずんば、明日病みて死なん

*子曰朝聞道夕死可矣
(論語)

とするに臨み、後悔腸を斷つことあらん。古人曰く「あしたに道を聞かばゆふべに死すとも可なり」と。朝に理想するとこゝろを力の及ばん限り夕まで實現し得ば、たちどころに死すとも悔なかるべきなり。むかし俳人芭蕉は「わが年ごろ詠み捨てたる句は皆以てわが辭世の句となすに足る」といひきとか。蓋しこの覺悟ありければならん。明日ありと思ふ天國と、明日なしと思ふ天國と、其の何れに偏するも墮獄の罪人なり。諸君はこの二國の間を融會自在如意不斷に往來して、片時も一處に止まるべからず。

(坪内逍遙 文學その折々)

練習

一、左の語句を解釋すべし。

無常の中に常住の大道あり

*融會自在
如意不斷

宇宙は矛盾の巢窟なり

朝に道を聞かば夕に死すとも可なり

精進 名聞 浮屠 刹那 辭世

二、「されど」「然り」を含む二つの短文を作れ。

二 舊都の月

*治承四年

六月九日の日、新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸と定めらる。舊き都は荒れゆけど今の都は繁昌す。あさましかりつる夏も暮れて、秋にも既になりにけり。秋もやうやう半ばになり行けば、福原の新都にましくける人々、名所の月を見んとて、或は源氏の大将の昔の蹤をしのびつつ、須磨より明石の浦づたひ、淡路の迫門をおし渡り、繪島が

磯の月を見る。或は白浦吹上。和歌の浦住吉。難波高砂尾上の月の曙を眺めて歸る人もあり。舊都に残る人々は伏見廣澤の月を見る。中にも徳大寺の左大臣實定の卿は、ふるき都の月を戀ひて、八月十日あまりに福原よりぞ上り給ふ。

何事も皆變りはて、稀に残れる家は門前草深くして庭上露滋し。蓬が袖、淺茅が原、鳥のふしどと荒れ果て、蟲のこゑぞ怨みつゝ、黃菊紫蘭の野邊とぞなりにける。今故郷の名残とては、近衛河原の大宮ばかりぞましゝける。大將その御所にまゐり、まづ隨身を以て總門を敲かせらるれば、内より女房の聲にて「誰ぞや蓬生の露うち拂ふ人もなきところにて」と咎むれば「これは福原より大將殿の御のほり候ふ」と

*近衛天皇の皇后藤原多子、實定の妹

優婆塞

申す「さはべらば總門は錠のさゝれて候ふぞ、東の小門より入らせ給へ」と申しければ、大將「さらば」とて東の小門よりぞ參られける。大宮は御つれづれに昔をや思召し出でさせ給ひけん、南面の御格子上げさせ御琵琶あそばされけるところに、大將つと參られたれば、暫く御琵琶をさし置かせ給ひて「夢かや現か、これへ」とぞ仰せける。源氏の宇治の巻には、優婆塞の宮の御女秋の名残を惜しみつゝ、琵琶を調べて夜もすがら心をすまし給へるに、有明の月の出でけるを猶足らずや思しけん、撥にて招き給ひけんも今こそ思召し知られけれ。

小侍従と申す女房も此の御所にぞ侍はれける。大將この

女房をよび出でて昔の物語どもし給ひて後、小夜もやうやう更け行けば、ふるき都の荒れゆくを今様にこそ謠はれられ。

ふるきみやこを

きて見れば、

あさぢが原とぞ

なりにける。

月のひかりは

くまなくて、

あさかぜのみぞ

身にはしむ。

とおしかへしおしかへし三反謠ひすまされたりければ、大宮をはじめ奉りて、御所中の女房たち皆袖をぞ濡らされる。さる程に夜もやう／＼明け行けば、大將暇申して福原へぞ歸られける。(平家物語)

三 赤壁賦

宋神宗元豐五年
詩陳風、月出皎兮、佼人僚兮、舒窈窕兮

壬戌之秋七月既望、蘇子與客泛舟遊於赤壁之下。清風徐來、水波不興。舉酒屬客、誦明月之詩、歌窈窕之章。少焉月出於東山之上、徘徊於斗牛之間。白露橫江、水光接天。縱一葦之所如、凌萬頃之茫然。浩浩乎如馮虛御風、而不知其所止。飄飄乎如遺世獨立、羽化而登仙。於是飲酒樂甚、控舷而歌之。歌曰：桂棹兮蘭槳、擊空明兮泝流光。渺渺兮予懷、望美人兮天一方。客有吹洞簫者、倚歌而和之。其聲嗚然、如怨、如慕、如泣、如訴。餘音嫋嫋、不絕如縷。舞幽壑之潛蛟、泣孤舟之嫠婦。

蘇子愀然正襟危坐而問客曰：何爲其然也。客曰：月明星稀、鳥

月明星稀、
烏鵲南飛、
繞樹三匝、
何枝可_レ依

鵲南飛。此非曹孟德之詩乎。西望夏口。東望武昌。山川相繆。鬱乎蒼蒼。此非孟德之困於周郎者乎。方其破荊州。下江陵。順流而東也。舳艫千里。旌旗蔽空。酺酒臨江。橫槊賦詩。固一世之雄也。而今安在哉。況吾與子。漁樵於江渚之上。侶魚蝦。而友麋鹿。駕一葉之扁舟。舉匏樽。以相屬。寄蜉蝣於天地。渺滄海之一粟。哀吾生之須臾。羨長江之無窮。挾飛仙以遨遊。抱明月而長終。知不可乎驟得。託遺響於悲風。

蘇子曰。客亦知夫水與月乎。逝者如斯。而未嘗往也。盈虛者如彼。而卒莫消長也。蓋將自其變者而觀之。則天地曾不能以一瞬。自其不變者而觀之。則物與我皆無盡也。而又何羨乎。且夫天地之間。物各有主。苟非吾之所有。雖一毫而莫取。惟江上之清風。與

山間之明月。耳得之而爲聲。目遇之而成色。取之無禁。用之不竭。是造物者之無盡藏也。而吾與子之所共適。客喜而笑。洗盞更酌。肴核既盡。杯盤狼藉。相與枕藉乎舟中。不知東方之既白。

(蘇軾 東坡全集)

四 床の秋風

東山の邊なる住家を出て、相坂の關うち過ぐる程に、駒ひきわたる望月の比もやうく、近き空なれば、秋霧たちわたりて深き夜の月影ほのかなり。ゆふつげ鳥かすかに音づれて、遊子なほ残月に行きけん函谷の有様思ひ出でらる。むかし蟬丸といひける世すて人、この關のあたりにわらやの床を結びて、常は琵琶をひきて心をすまし、大和歌を詠じて懷

望月の駒は
信濃佐久郡
本牧村望月
の牧より出
づ、八月十
六日京へ奉
き來り貢獻
するなり
遊子猶行
於殘月函
谷蟬鳴(和
漢朗詠集)

世の中はと
てもかくて
もすこして
んみやもわ
らやもはて
しなれば
(今昔物語)

逢坂の關

をのべけり。嵐の風はげしきをわびつゝ、ぞ過ごしける。

古このわらやの床のあたりまで

こゝろをとむる逢坂の關。

關山せきを過ぎぬれば、打出の濱、粟津の原なんどきけども、いまだ夜のうちなれば、さだかにも見わからず。むかし天智天皇の御代、大和國飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡に都うつりありて、大津の宮を造られたりときくにも、この程は、古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。

さざ波や大津の宮のあれしより

名のみ残れるしがの故郷。

曙の空になりて瀬田の長橋うち渡すほどに、湖はるかに

笠朝臣麻呂
鬻老頃の人
世の中を何
にたとへん
朝開き漕ぎ
いにし舟の
あとなきが
こと
(萬葉集)



あらはれて、滿誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝ、よめりけん歌思うたひ出でられて、漕ぎ行く舟のあとの白波しらかぜまことにはかなく心細し。

よの中をこぎ行く舟によそへつゝ、

ながめし跡をまたぞ眺むる。

この程をも行き過ぎて野路といふ所に至りぬ。草の原露しげくして旅衣いつしか袖の雫とくろせし。篠原といふところを見れば、東西へ遙に長き堤あり。北には里人住家をしめ、南には池の面とほく見えわたる。むかひの汀、緑深き松のむ

昆明春昆明
春池岸古
春流新影
浸南山青
澗溪
(白氏文集)

世の中は何
か常なる飛
鳥川きのふ
の淵ぞ今日
は瀬となる
(古今集)

近江國蒲生
郡
尚齒

らだち波の色もひとつになり、南山の影をひたさねども青くして澗瀧たり。洲崎とどころに入りちがひて、葦かつみなど生ひわたれる中に、鶯鳴のうちむれて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。むかし都を立つ旅人、この宿にこそとまりけるが、今はうち過ぐるたぐひのみ多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變りゆく世のならひ、飛鳥川の淵瀨には限らざりけめとおぼゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより

あれのみまさる野路の篠原。

鏡の宿に至りぬれば、昔な々の翁のよりあひつゝ、老をいとひて詠みける歌の中に、

鏡山いざ立ちよりてみて行かん

年へぬる身は老いやしぬると。

といへるは、此の山の事にやと覺えて、宿もからまほしくおぼえけれども、猶おくさまにとふべき所ありてうち過ぎぬ。立ちよらで今日はすぎなん鏡山

しらぬ翁のかげは見ずとも。

ゆき暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風、夜ふくるまゝに身にしみて、都にはいつしかひきかへたる心ちす。枕にちかき鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺もかくやありけん。とあはれなり。行く末遠き旅の空思ひつづけられて、いといた

近江國蒲生
郡武佐村

遺愛寺鐘歌
枕邊香爐
峯雪撥簾
看
(則詠集)

う物悲し。

都いでていくかもあらぬ今宵だに

かたしきわびぬとこの秋風。 (東園紀行)

五 百蟲譜

昔^(一)莊周夢
爲^(二)胡蝶^(三)栩栩然
胡蝶也
俄然覺則蓬
々然周也云
々 (莊子)
^(三)花に鳴く鶯
水にすむ蛙
の聲を聞け
ばいきとし
いけるもの
いづれか歌
を詠まざり
ける
^(三)古池や蛙飛
び込む水の
音
(松尾芭蕉)

蝶の花に飛びかひたる優しきものゝ限りなり。おもしろ
き音も出さねば、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。
さてこそ莊周が夢もこのものには託しけめ。蛙は古今の序
に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月
夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目
さましたれば、この物の事さらにも誇りがたし。

蟬はただ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日
ざかりに啼きさかる頃は人の汗しぼる心地す。されば初蝶
とも初蛙ともいふ事をきかず。この者ばかり初蟬といはる
るこそ大なる手がらなれ。やがて死ぬけしきは見えずと、こ
のものゝ上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ぶべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛び
かひ草にすだく五月の闇は、ただこの者の爲にやとまでぞ
覺ゆる。しかるに貧^{*}の學者にとられて油火の代にせられた
るはこのものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませ
ざるは事の外の不自由なり。俳諧にはその真似すべからず。
日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎ

*車胤恭勤
不^(一)倦^(二)博學
多通^(三)家貧
不^(四)常得^(五)油
夏月則練
蠶^(六)盛^(七)數十
螢火以照
書^(八)以^(九)夜繼
日^(十)焉^(十一)晉
書^(十二)車胤傳

て、夕は草に露おく頃ならん。つくづくほうしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して、この者になりたりと世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せんとす。もろこしのむかしには、退隱退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとおそろし。さはいへ廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるはいさゝかあはれ添ふ折もあらんか。彼はかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道にちりほひたる宿なし者をばくもとはいかていふやらん。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたがために身をこ

楚國製舍初
隨楚王朝
宿未央宮
見蜘蛛大
如粟、四面
榮羅網有
蟲觸之而
死。舍乃歎
曰、吾生亦
如此耳、仕
官者人之羅
網也、豈可
淹沒於
是乎冠而
退、時人謂
之爲蜘蛛
之隱。

がすや。蜂蟻ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は物ずきの謗となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。

蟻は明暮にいそがしく世の營みに隙なき人にも似たり。東西に聚散し餌を求めてやまず。いつか槐安槐安の都をのがれてその身の安き事を得ん。さるもたよりあしきかたに穴を營みて千丈の堤を崩すべからず。

狗の齒に噛まるゝ蚤はたま〜にして、猿の手にさぐらるゝ虱は逃るゝ事難かるべし。

蝸牛は只水にあるべきものゝいかで草葉に遊ぶらん。家もちたれども行く先々を負ひあるくは、水雲の安きにも似

*淳于棼、醉
夢入大槐
安國、見
王。王曰、
吾南柯郡、
風卿爲
守。居凡廿
載。使者送
出穴、遂
寤。尋古槐
下蟻穴、洞
然明。乃
槐安國。又
一穴直上、
南枝、即南
柯郡也。

ず。

蛇蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用のことなり。

蟻螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇よりその心いかなり。人の上にも此のたぐひはあるべし。

蟹の歩にたとふべきものこそなけれ。ただ原吉原を駕にのりて富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・響蟲は其の音の似たるを以て名によべるか。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名有りて、松を枯らし人に疎まる。一つ在所に二人の八兵衛ありて、ひとり後生をねがひ、

駿河國駿東郡原
駿河國富士郡吉原

秋風に縊び
わらし藤袴
つづりさせ
てふきり
ざりすなく
(古今集)
あまの刈る
藻にすむ蟲
のわれから
と音をこそ
なひめ世を
ば怨みし
(古今集)

ひとり殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きりぎりすのつづりさせとは人のために夜寒を教へ、藻に住む蟲はわれからとただ身のうへをなげくらんを、蓑蟲のちよと呼ぶは、母をばしたはで、など父をのみ戀ふらんとあやし。(編衣)

六 送安井仲平東遊序

嘗觀於當今之學徒、其在庠校、孜孜勤苦者有矣。及退庠、則倦焉。退庠而不倦者有矣。及畜妻子、則衰焉。畜妻子而不衰者有矣。及獲祿位、則廢焉。獲祿位而不廢者有矣。逢一患、嬰一災、則挫焉。蓋其退庠而倦者、其志小者也。畜妻子而衰者、其器狹者也。獲祿

位而廢者其意滿者也。逢一患嬰一災而挫者其氣不剛者也。吾觀於當今之學徒衆矣其能退庠而不倦畜妻子而不衰獲祿位而不廢逢災患而不沮不挫若我安井仲平者未多觀也。仲平、肥人、眇然小丈夫、狀寢陋甚。

文政七年

歲之甲申來入昌平、鬻居三年、屹々不少懈、讀書眼透、紙背、識慮高卓、議論出人、意表、余深畏事之、歸鄉後、歲數次必有書至、大率激憤、忼慨、以僻壤乏師友、爲言、其藩士之來于東者、僉云、仲平少時孤介、短於容人、今則直而平、方而恕、接衆諧和、事長有禮、闔藩敬信、至參預國事、致身奉公、所建白、皆切時務、有著績、可傳述、而講學則益勤矣、閒從其君、祇役江戶、所居舍、湫隘樸陋、塵埃滿席、而讀書之燈、常烟々、時從師友、出其新得、輒卽驚人。

祇役

孤介

天保九年

子然

戊戌歲、遂辭官、挈家來就學於江戶、居無幾、而逢火、資財蕩盡、未踰年、季女又病、痘夭、仲平自降祿爵、離桑梓、子然僑居乎三千里外、竈突未黔、累逢不虞之難、人倫之變、皆人所不能堪、而志氣不少撓、讀書日必盈寸、作文年可以囊計、齡垂五十、俛焉刻厲、不知頭之將蒼、此豈今世之士哉、仲平巧心計、自言吾於數術、不學而能焉、以予觀之、其稟於天者、於智特深、古人云、性敏者多不好學、仲平以最敏之質、嗜學甚於食色、故格致日新、識度日躋、治家善審出入之計、不虞之變、待之有備、推而至邦國天下、其於利病得失、確有成算、咸可施行、謂之非今世之士、非譽也。

格致

栖々

予賦性鈍、百事皆拙、而於算最嗜、以故治產無檢、終歲栖々、精神殆乎耗、自有妻孥、業覺日退、而事君無狀、未能涓埃益乎國、居

恆觀於仲平以自勵。然惟恐其終身不能及也。今茲季夏仲平欲渡刀禰川。登日光山。還軼北總。遊千水府。觀名公賢佐之所經綸。然後東入陸奥。縱覽金華松洲之勝。與衣川高館之陣蹟。壯其意氣。以為進學之資。其驚人者。將滋不可測也。嗚呼。可畏也哉。

(鹽谷世弘 岩陰存稿)

七 漢詩 三首

一 送元二使安西

渭城朝雨絕輕塵。 客舍青青柳色新。

勸君更盡一杯酒。 西出陽關無故人。 (王維)

二 黃鶴樓送孟浩然之廣陵

故人西辭黃鶴樓。 烟花三月下揚州。

孤帆遠影碧空盡。 唯見長江天際流。 (李白)

三 謝亭送別

勞歌一曲解行舟。 紅葉青山水急流。

日暮酒醒人已遠。 滿天風雨下西樓。 (許渾)

八 天 海

詠 天

天海丹雲之波立月船

星之林丹榜隱所見

柿本朝臣人麿

望不盡山歌

山邊宿禰赤人

田兒之浦從打出而見者眞白衣

不盡能高嶺爾雪者零家留

冬十月幸于難波宮時作歌

笠朝臣金村

荒野等丹里者雖有大王之

敷座時者京師跡成宿

令反感情歌

山上臣憶良

比佐迦多能阿麻遲波等保斯奈保奈保爾

伊弊爾可弊利提奈利乎斯麻佐爾

慕振勇士之名歌

大伴宿禰家持

大夫者名乎之立倍之後代爾

聞繼人毛可多里都我禰

九 農界を思ふ

筐底を探りて一書を得たり。これ石川丈山壁書の辭なり。
辭にいふ、

天高任鳥飛海關從魚躍。大丈夫不可無此度量。

筐底

農界を思ふ

懷襟

蘊藉

振衣千仞岡、濯足萬里流。大丈夫不可無此氣節。

瓜田不容履、李下不正冠。大丈夫不可無此敬畏。

月到天心處、風來水面時。大丈夫不可無此懷襟。

玉韜石生輝、珠藏川自媚。大丈夫不可無此蘊藉。

と。英氣澎湃、痛言直に心竅に徹するもの、眞に座側の箴とすべし。男子の處世須らくこの度量、氣節、敬畏、懷襟、蘊藉なかるべからず。然も今人、幾人かよくかくの如きものある。

人あり、「彼は度量大なり」と稱す。何ぞ知らん、其の行動坐臥度なく、一の定見なく、交はる處、甲にも可、乙にも可、漠然として何の取り所なきものたるを。氣節の如きは全く地を拂ひ、利ある所、他を排するに權謀術數を極め、その行爲に、その立

論に、悉く他の關係によりて支配せらるゝもの、比々皆然らざるはなし。偶、正理により毅然として立つ者あらんか。衆は之を目して頑陋よく世と推し移るを知らざる者となす。

敬畏の心は人の美德にて、世に處する士の刹那も服膺せざるべからざるもの。しかも、余や、不幸未だかゝる人に接せず。襟懷のかくの如きものは、よく人を落魄の境に慰め、世路の蹉躓も之を屈すること能はず。忙絶繁絶、他を眩せしむる時にあたりても、なほよく策の出づる處を知らしめ、一路分明、胸裏常蓄萬朶、春底の趣あり。しかも、余や、不幸未だこの種の人に見えず。蘊藉かくの如きものは、よく自ら恃むところに堅からしめ、篤實恭謙の盛徳を胚胎し來らしむ。しかも余

や、不幸未だかゝる人に會せず。かくの如くにして、余は實に我が日東帝國の將來について、甚だ憂慮の念に堪へざるものあるなり。他はしばらく之をおかん。ただ我が農界の上に余の卑言を陳ぜしめよ。

古來「農は國の本なり」といふ。その何故に國本なるかは世人の著眼點によりて異なるべきも、惟ふに國民これによりて衣食住の原料を得るの謂ならん。さても近世經濟社會の進歩と共に、世界萬國の相通ずることの容易なる時代にて、なほ農を以て依然その國本となすは何ぞや。こゝにおいてか、我等はそこに他の意義の原因あるを知らざるべからず。ある學者は唱ふ「現今經濟社會の有様にて、一國資本の大部

分は都府に集合し、都府は實に一國經濟力の主體なり。しかして、この都府の人民は二代にして一變し、その供給者は田舎なり。田舎は實に都府の人口の源泉なり。即ち農は國の本なり」と眞に然るべし。

然れども、農民たる者は、單に其の増殖力の強きを以てのみに國本たるにあらず。またその性質の保守的にして質素淳朴、道德廉恥の心に富み、一國元氣の淵叢として、その特殊の歴史により、その分に居り、國體を維持し、國家と其の命脈を共にするものなればなり。見よ、佛國農民ありて佛國立ち、獨逸農民ありて獨逸國存するにあらずや。佛の賢相某氏、嘗ていへることあり「佛國農民の減ずるは佛國をして孱弱な

らしむるものなり」と。ロッシェルも亦いへることあり。いはく「忠實にして強健に、よく外讎敵を防ぎ、内國安を保つものは農民なり」と。思ふに、わが農民の我が國における、其の關係ただに獨佛の比のみにあらざるなり。

醜醉

されど、社會ははやく既に腐敗の醜醉を始めぬ。道義心日に月に銷し、ただ利をこれ謀るに汲々として、また萬事を顧みるに遑あらず。この時に當りて、黃白を散ずるものはよく其の地位を占め、よく其の位を得べし。滔々たる社會皆然らざるはなし。この間に生存せんとするもの、これと競争せざるを得ず。こゝに於てか、我が農界も漸くまさにこの渦中に投ぜられんとするもの、蓋しやむを得ざるの數なり。世の考

黃白

慮を要請する處實にこゝにあり。

それ積極的に大動力を有するものは、消極的にもまた然らざるべからず。一度わが農民をして、其の特長とする所を忘れ、工商業者と收利場裏にこれが輸贏を争はんとするごとき誤謬に陥らしめんか、技倆の到底彼等に及ぶこと能はざるは炳然として明かなれば、その極遂に家財を蕩盡し、落魄寄邊なき天涯の漂浪者となり了らんのみ。國家の憂患これに過ぐるものあらんや。立脚の地すてに然らんか、これによりて立てる國家の命脈知るべきにあらずや。志士の憂ふるところ實にこゝにあり。

見よ、わが國の農家は、早く既にこの利己的經濟社會の染

汚を受け、漸くこの濁汚流の渦中に投ぜられつゝあることを。彼等のある者は思へり、播種し、耕耘し、然る後僅かの收利を待つは甚だ迂なり。しかず、餘財を見れば株券を買はん、或は取引場裏に一攫千金の僥倖を賭せん」と。かくの如きもの、全國の田舎到る所に少しとせず。かくて農家の營むべき事に従ひ、粒々辛苦の結果によりて蓄積したる餘財は、後日の農事資本とはならずして、多くは都府にむかひて空しく流出し、都府の資本却つて農業地方に反流する逆勢を現出するに至る。

この勢をして更に一步を進ましめんか、地方農家の困弊は層々その度を高め、終にまた救ふべからざるに至らん。即

逆勢

ち帝國の頭腦は既に亡ぶるものなり。この時に當り、初めて翻然として迷夢を覺まし、大聲狂呼するも亦既に遅いかな。余は敢へて猥りに杞人の憂をなす者にあらず。この余が説を疑ふものあらば、宜しく去つてその郷につき嚴密に調査せよ。而して後、その傾向を凝思三省せば、蓋し思半ばに過ぐるものあらん。

されば今の時に當り、國家萬年の計をなすは實に焦眉の急なり。しかして其の救済の局に當るものは、農界の先覺者たるを自任する農學者、實業有志家諸氏を、おいて誰ぞや。思ふに、農民特に我が國の農民は、數千百年の遺風を受け、淳朴實に掬すべきの風を存すれど、同時に一方にありては頑迷

陋守、容易に度し難きものあれば、これを導きこれを教へんには、形式的なる演説位にてその效あるべからず。これをなさんには、宜しく獻身的に、誠心誠意おのれを責め、他を撫し、以て努力奮發事に従はんことを期せざるべからず。

かの黄白の多寡によりて、おのが行爲を左右するが如き薄弱なる思想を有する懦夫輩にありては、農業振起の事一毫も企て及ぶべきにあらず。さても今日の状況を見るに、その朝にあるものと野にあるものとを問はず、その行爲として表顯せらるゝものは、多くは自己の意見にあらずして、甲に乙に變轉し、後來自己のためにもがなと思ふものゝ説を媚び迎へ、或はその無理なるを知るとも、枉げてこれに赴く

扶濟

もの實に少しとせず。かゝる薄志弱行の者、いかでか農民扶濟の如き大事業に堪ふるを得べき。

勝海舟翁の像



海舟翁嘗て人に語りて曰く、今人は自己によりて事をなす者甚だ少きがゆゑに行爲果斷ならず。かくて折角の事業も蹉躓に委するもの多し。余は事に當りては必ず自らこれをなすことを期す。幕府引渡のときのごとき則ち然りきと。

これ大いに味ふべきことならずや。かの今日才子と稱せらるゝものを見るに、二宮尊徳翁の所謂「小知にして才辯なる者」多く、一朝事の目前に現はるゝ時は、趨起逡巡なるべく難

提携

局を避けて好都合の事のみを擇ぶなど、その醜態實に嘔吐を催すべし。即ち丈山のいはゆる度量・氣節・畏敬・襟懷・蘊藉の特にこゝに欽仰し服膺すべきの至言なるを見る。

げに我等は、赤誠みづから欺かざるやう互にあひ提携して、我等の農界に於ける天職を盡さんことをつとめざるべからず。もし然らざれば、いかに形式的に農事試験場を設け、農學校を起し、或は農工銀行に、或は農會に、其の形骸の美を競ふとも、それは終に何の用をもなさざるべきなり。

(針塚長太郎)

練習

左の語句を解釋せよ。

痛言直ちに心竅に徹す 輸贏を争ふ 杞人の憂をなす
 思半ばに過ぐ 積極的 消極的

一〇 言語

一

多く言ふことなかれ、多く言ふことなかれ。意を傳ふる何ぞ必ずしも三寸の醜物をもちひん。張儀の功をなせるは、巨口を張開して「わが舌猶在りや」と言ひしところにおいて、秦王面前に唇を動かし舌を鼓せる時にあらず。蘇秦の功を成せるは、機杼の音を聞きて俯首一番せしところにおいて、趙王殿裏に疾呼し絮説せる時にあらずと。これ亦一説なり。

二

沈黙は愚人の甲冑なり、奸者の城塞なり。明白々の心地、温

共に支那戰國時代の辯士

絮説

照々の胸廓ならば、千言萬語すとも何の不可かあらん。債鬼を怖るゝものは門を閉づること堅く、悪事を營めるものは窓を開くを忌むと。これ亦一説なり。

三

大丈夫坐すればすべからく孤峯の雲に聳ゆるが如くなるべし。臥すればすべからく長江の野によこたはるが如くなるべし。語は雷の鳴るが如く、黙は水の凍るが如くなるべしと。これ亦一説なり。

四

老将は兵を談ぜず、良賈は深く藏す。言おほきものは卑しとせられ、語少きものは憚らる。言を以て招くは無言を以て

招くに如かず。語りて斥くるは無言にして斥くるに如かず。桃李何を言ひてか自ら蹊を成せる。宗廟抑、何を語りてか人敢へて瀆さざると。これ亦一説なり。 (幸田露伴 譯言)



一、左の語句を解釋せよ。

意を傳ふ何を必ずしも三寸の舌を用ひん

沈黙は愚人の甲冑なり奸者の城塞なり

老将は兵を談ぜず良賈は深く藏す

二、「これ亦一説」を終りとせる短文を作れ。

一一 前出師表

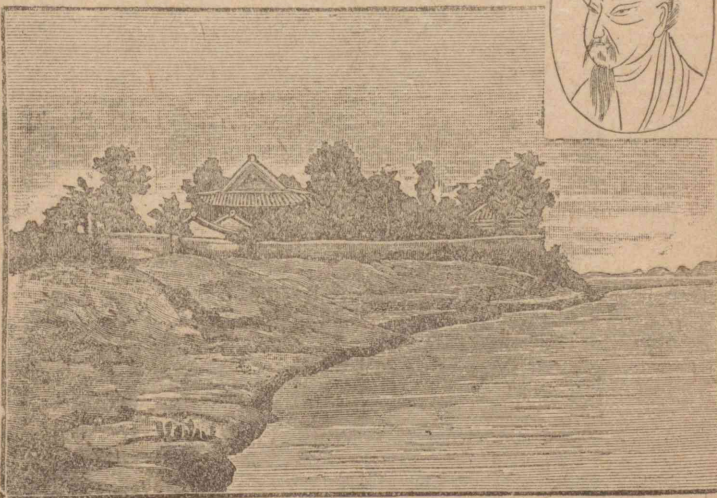
諸葛亮

臣亮言。先帝創業未半、而中道崩殂。今天下三分、益州罷弊。此誠危急存亡之秋也。然侍衛之臣、不懈於內、忠志之士、忘身於外。

也。受命以來、夙夜憂慮、恐付託不效、以傷先帝之明。故五月渡瀘、



諸葛亮の像
と廟



深入不毛。今南方已定、甲兵已足、當帥將三軍北定中原、庶竭駑鈍、攘除姦凶、以興復漢室、還於舊都。此臣之所以報先帝而忠陛下之職分也。

至於斟酌損益、進盡忠言、則攸之禱允之任也。願陛下託臣以討賊興復之效、不效、則治臣之罪、以告先帝之靈。若無興德之言、則責收之禱、允等之咎、以彰其慢。陛下亦宜自謀、以諮諏善

道察納雅言、深追先帝遺詔、臣不勝受恩感激。今當遠離臨表、涕泣不知所云。
(諸葛亮 諸葛丞相集)

一一 霜の美

楓錦柿緋既に去りて、橙黄橘綠來り、稻正に熟し、蟹正に肥ゆ。この時吾人は始めて霜の美を見る。

均しくこれ水蒸氣の凝結なり。而して彼の霞や、雨や、雪や、詩に歌はれ繪に描かれ、天與の美、自然の妙として愛好賞玩せらる。殊に雪の如きは、月花と並べて天下の三大美として傳唱せらる。雪や靈あらば、まさに人間の知遇に泣くべし。

その六出繽紛たる時、空林枯木一朝にして花咲き、玉樓銀

臺一夜にして成る。雪や眞に美なり。

或は時雨となり、或は春雨となり、或は梅雨となり、或は驟雨となり、晴好以外別に雨奇の絶景を出す。一過すれば則ち、山色と月光とをして、新更に新を加へしむ。雨や眞に美なり。

霞は向岸の漁家を飾り、或は湖畔の樵家を鎖ざし、杳々靉靆、名もなき山の花霞、人影を見ずして人聲を聞くべき妙景、繪も亦及ばず、霞や眞に美なり。

然れども、霜の美決して此の三者に遜らざるなり。而して霜や殆ど詩人、畫家に其の名を忘れられ、風懷の高士亦一顧の勞に吝ならんとす。其の不遇寧ろ憐むに堪へたり。艸廬湯沸え火初めて紅なる邊、吾人霜の美を尋ねて五美を得たり。

李義山唐の詩人
上杉謙信

一、霜の美は月夜に在り。青女は霜裡にあり、嫦娥は月中にあり。いづれも白を深更に鬪はせて、水天一色、萬里澄明、冷骨に徹し、清肌に染む。造花の精妙なる此の間僅に數聲の砧衣と一鳴の過雁とを點出し來る。色と聲と相投じて玲瓏絶、透徹絶、これを一掬すれば詩脾頓に一泓の清なるが如し、李商隱が「百尺樓臺水接天」と歌ひしもこの景なり。不識庵が「霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更」と歌ひしもこの景なり。

二、霜の美は曙天にあり。空はなほ殘月を浮べて岸樹寒颼に叫ぶ時、板橋の繁霜未だ人跡を印せず、烟水茫々の間に孤立して曙光を俟つこと多時、初めて洲外の沙禽を見、山寺の鐘聲を聞く、この時や滿目凄清、乾坤半點の塵埃を止めず。

宋時代の學
者

竹外の茶梅、籬下の寒菊、尙殘色に誇るあり。彼の白玉蟾が所謂「淡々著烟濃著月。深々籠水淺籠沙。何ぞ獨り梅のみならんや。」

三、霜の美は白にあり。早起落月を屋梁に送りて四顧すれば、蘆荻も白く、茅舎も白く、瓦も白く、池塘も白く、田畝も白く、馬嘶も白く、驛鈴も白く、渡口に舟を喚ぶ聲も亦白し。殊に霜月の夜の白きに至つては、その絶美遂に吾人の鈍筆にてこれを寫すこと能はず。

四、霜の美は紅にあり。霜そのもの紅なるにあらず、然れども霜は他を紅化する作用あり。世人龍田姫あるを知りて青女あるを知らず。而して何ぞ知らん、満山の淡紅深緋は龍

田姫が織りたるものにあらずして、青女が染め成したるものなることを。夏來の新緑、鴻雁來り燕子歸る時に及びて忽ち紅化し、到る處秋燃えんとす。もし空林に華さかせたる雪を美なりとせば、新緑を紅化せしめたる霜は更に美なりといふべし。これ龍田が芳野と竝稱せらるゝ所以にして、また『霜葉紅於二月花』と歌はるゝ所以なり。

五、霜の美は凜に在り。秋氣凄絶、霜天に滿つる時は、士氣凜然、また劔鋭を加ふ。吾人をして夙起惰眠を貪らしめざるも、威容嚴肅、自重、自尊を想はしむるも、實に霜の賜なり。霜の凜々たるは彼の霞の杳々、雨の濛々、雪の皓々に比して美なることいくばくぞ。

*遠上寒山石
徑斜白雲生
處有人家停
車坐愛楓林
晚霜葉紅於
二月花
(杜牧)

嗚呼、霜の美なること斯くの如し。而して其の世に歌はれ人に知らるゝこと霞・雨・雪の十分が一にも及ばず、吾人實に霜の不幸を憐む。思ふに、霜、人に知らるゝを欲せざるか、將、人霜を知る明なきか。 (石橋忍見)

一、左の語句を解釋せよ。

夙懷の高士豈一顧の勞に吝ならんや

士氣凜然また劍銳を加ふ

詩脾頓に一泓の清なるを覺ゆ

籬下の寒菊殘色に誇る

二、杳々 皓々 を含める二つの短文を作れ。

一三 人生と四季

語の創新なるをめづるは人情の自然なれども、語は新し

きをのみ取るべきにあらず。古くよりいひふるしたる語の今なほ棄てがたきまゝあり。かゝる語は、分外に幽玄の旨を含めることあり。更に敷衍せらるべきことあり。新しき解釋を容るゝことあり。

萬古一色

語の創新ならざるを惡むは、自然の風物の萬古一色なるを惡まんが如し。いかなる新釋を容れても餘あらん語は實に不易の妙語なり。その不拔なるは自然その物にも比すべし。しかしてかゝるたぐひはひとり賢者・詩人の語において見るのみにあらず、俚歌および俗言のうちにもしばしばあり。かの人生を四季に配して、少壯を春季とし、老衰を晩秋、又は冬季とするが如きその一例なり。

陳腐

この陳腐なる對比は、何人も思ひつくべき平凡なる喩なれど、その新奇ならぬ所やがてその妥當なる所以なるが如し。おもふに、人の一生を物にたとへたるは、東西の詩文章にいと古くよりあまた見えたれど、かばかり妥當にして旨味のふかきはあらじ。ジョンソンが航海に比し、シェークスピアが演劇にくらべたるなどは人の知る所にて、かゝるたぐひの著想は、こなたのにも見えたれど、これらはむしろ頓才の落想たるに近く、その寓意もまた皮相ばかりにして淺々し。四季に比べたるものこそ、いよゝゝ玩味して、その旨いよゝゝ深しといふべけれ。

蓋し人生と四季と相似たるは、詩人の想像をまたずして

蘇國の大劇
詩家
英國の文豪

皮相

しるけし。紅顔の花に似たるを見、白髪の雪に似たるを見んもの、誰か春冬を聯想せざらん。うら若きを人生の朝と名づけ、老いくちたるを人生の夕と呼べるにひとしく、翁をさして幾十冬の霜をいたたくといひ、少女の麗しきを稱して二八の春の花といはんは、自然に思ひよるべき喩なり。かゝるたぐひ一々に擧げていはば數かぎりもなけれど、これらは皆一かどほどの對比にて普く四季に配したるにはあらず。さるにても、この比喩は、かくばかり妙にして妥當なるに、想像のいみじき詩人の、などて今一層敷衍せざりしと心得がたく思ひし年ごろ、いさゝか心して東西の詩文を讀みしに、英國の作家のうちには、四季に人生を思ひよせたるもの

少からず。しかるにわがくにの歌人の作には、四季を歌ひたるは限しらぬほどにあれど、いづれもただ四季の風物光景をうちながめたるのみにて、深く人生に思ひよせたるはなし。

總じて色彩を本としたる對比にて、これの色彩とかれの色彩とを比べたるが多し。客觀的すなはち視感上の對比なり。英國の詩人のも大かたは客觀的なれど、まゝ主觀的といふべきもの少からず。トムソン、ソーシーが作に見えたる觀念の如きはまことに玄妙なり。ソーシー秋を詠じて、

人は秋季の美しきをひたすらに哀しきものに思ひなして、年若い精神衰へ苦痛身にあまりながら、なほ死にやら

*英國の詩人

ぬ老人のいと淺ましげなるに思ひ寄すれど、わが眼にはしか見えぬ。秋の長閑にして物靜かなるは、例へば肉體は衰へたれど、精神はなほ健なる人の後世の信心堅固にして、老いていよく、心の花の開けたらんが如し。人は秋の景物を黯澹落莫なるものとなし、このうつくしの世の中に、あるおそろしき元機活動し、生物のすみかなる氣土、水の三界は、互に相吞噬して止む時なく、又人間には惡害と不幸と纏綿し、さながらに八重纏のほぐしがたきやうに、絶えて行末の頼まれぬ、いと淺ましきものなりと思ふ。あはれ世の人の信念も、わが思ひなせる如くならばや。あはれ死は常に生を産み、惡は常にみづから亡びゆくことを

知らせばや。あはれこのおそろしきあらしのかなたに、麗しき天つ日の、ほのぼのとさしのぼる影を見せばや。しかば何物か喜の種ならぬ。世のうき事はことごとく忘らるべし。たれかは常に神明の大徳のいと偉なるを認めざらん。

と歌へり。また冬を詠じて、

春の長閑に和げる、夏の夕暮の風の涼しき、秋の風の錦なす、森にわたる、いづれ美しからぬはなけれど、寂寞にして静かなる冬の景色の、さながら造化の禪定したらんやうなるこそ、静平なる心には樂しけれ。

と歌ひ、くさぐさの景物を描ける後、

禪定

いでや造化が冬といふ墓穴のうちに潜みかくれて、生ひ出づべき芽をもいささず、花ひとつだに咲かぬほどぞ、つらく考ふれば樂しかりける。かくしばしかくろへるは、やがてまた來ん春を待ちて、こよなく麗しう装はせ、生ひ出づべき芽をもひらき、花をも咲かせんためと思へば。と歌へり。かうやうの想、かなたの作には乏しからねど、和漢のにはいと稀なり。

ことにわが國の詩文人の四季に對する感想は、おしなべてかたよりたり。彼等むかしは春秋の優劣を風流心に分けかねけんを、いつしか秋の色をひとへに悲しとのみ見すて、秋の七草の優にやさしき、紅葉の錦のはてやかなるをも、

大かたは哀をさそふ媒とのみ詠めて、秋の心を字のまゝに愁と釋きつ。

この故に彼等の四季を歌ふや、前半は常に樂しけれど、後半は常に悲愴なり。これ一つには和漢の詩歌のとかくに事物の客觀に泥みて、相を詠ずるを主とせるにより、また二つには中ごろ佛敎の渡り來て、無常變轉のことわりを教へ、秋冬の景物をもてその無常觀の好比喻となせるによるならめど、その觀のとかくに悲哀に偏したるは事實なり。

げにや、秋の相は蕭殺慘愴たる者なれど、その恰く萬物をして豐熟せしむる精神は、頗る樂觀を喚び起すべきにあらずや。秋の風の漸瀝として蕭颯たる、恐らくは人をして悚然

脱々

たらしめん。しかれども、その所謂小春日和の脱々として舒緩なる、なか歌人の快感をひかざりけん。

和漢の詩人の冬に對する感想は更に悲哀なり。されど、その『絶無卽發菩提心』たる理を觀じ來らば、冬の落莫はやがて無言の師にあらずや。この故にバルンスは特に冬季において一種の悅樂を感じ、すなはちその故をわきまへて曰く、

余が冬を愛するは、多年の數奇不幸のためにわが心の悒鬱に傾けるによるならめど、しかもその落莫たる頽廢と凜烈なる風雲とは、暗に余が心を高めて偉大高壯なるものに同感するに便ならしむ。覆載の間、いまだ陰雲空を淹ふ冬の日、寒林の蔭に逍遙し、北風の怒りて樹間に吼え、

*英國の詩人

數奇

覆載

渴仰

野にわたりて怒號するを聞くばかり心地よきことなし。冬は余が無上の歸依節なり。余が心は恍惚としてひとへに彼を渴仰せんとす。古詩人の言によれば彼は風翼に駕して行くとかや。余は實に冬において彼に熱誠を感じんとするなり。

と。徒に悲哀を感じずして畏敬を感じ、絶望せずして歸依渴仰す。これわが詩文中に殆ど曾て見ざるところなり。

(坪内逍遙 文學その折々)

一四 孟子三章

一 曾子養志

孟子曰、事孰爲大、事親爲大、守孰爲大、守身爲大、不失其身而能事其親者、吾聞之矣。失其身而能事其親者、吾未之聞也。孰不爲事、事親事之本也。孰不爲守、守身守之本也。

曾子養曾皙、必有酒肉、將徹、必請所與、問有餘、必曰有、曾皙死、曾元養曾子、必有酒肉、將徹、不請所與、問有餘、曰亡矣、將以復進也。此所謂養口體者也。若曾子、則可謂養志也。事親若曾子者可也。

二 大丈夫

景春曰、公孫衍、張儀、豈不誠大丈夫哉。一怒而諸侯懼、安居而天下熄。孟子曰、是焉得爲大丈夫乎。子未學禮乎。大夫之冠也、父命之、女子之嫁、母命之、往送之門、戒之曰、往之女家、必敬必戒、無

違夫子以順爲正者。妾婦之道也。居天下之廣居。立天下之正位。行天下之大道。得志與民由之。不得志獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。

三、舍生取義者也

孟子曰。魚我所欲也。熊掌亦我所欲也。二者不可得兼。舍魚而取熊掌者也。生亦我所欲也。義亦我所欲也。二者不可得兼。舍生而取義者也。

生亦我所欲。所欲有甚於生者。故不爲苟得也。死亦我所惡。所惡有甚於死者。故患有所不辟也。如使人之所欲莫甚於生者。則凡可以得生者。何不用也。使人之所惡莫甚於死者。則凡可以辟患者。何不爲也。

由是則生。而有不用也。由是則可以辟患。而有不爲也。是故所欲有甚於生者。所惡有甚於死者。非獨賢者有是心也。人皆有之。賢者能勿喪耳。一簞食。一豆羹。得之則生。弗得則死。噉爾而與之。行道之人。弗受。蹴爾而與之。乞人不屑也。萬鍾則不辨禮義而受之。萬鍾於我。何加焉。爲宮室之美。妻妾之奉。所識窮乏者得。我與鄉爲身死而不受。今爲宮室之美。爲之。鄉爲身死而不受。今爲妻妾之奉。爲之。鄉爲身死而不受。今爲所識窮乏者得。我而爲之。是亦不可以已乎。此之謂失其本心。

一五 金色堂

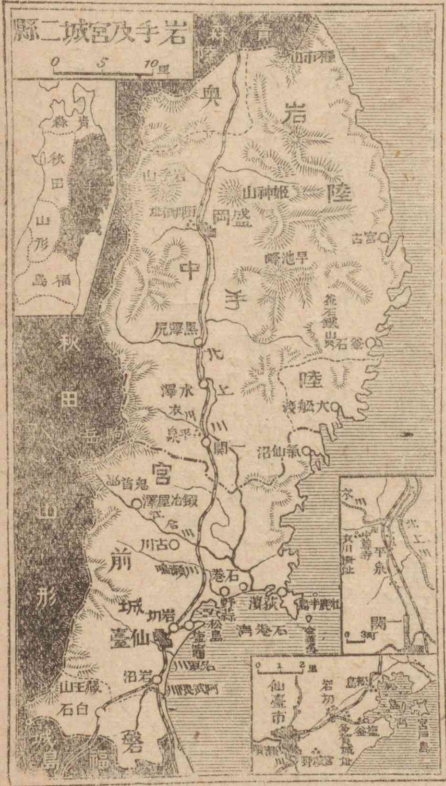
十一日瑞巖寺に詣づ。當時三十三世の昔眞壁の平四郎出

文祿二年五月
陸奥國宮城
郡松島にお
り

家して入唐歸朝の後開山す。その後、雲居禪師の徳化によりて、七堂藝改まりて金壁莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりけり。

十二日平泉へと心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞き傳へて行く。人跡稀に雉兔芻蕘の往きかふ道、そこもわか

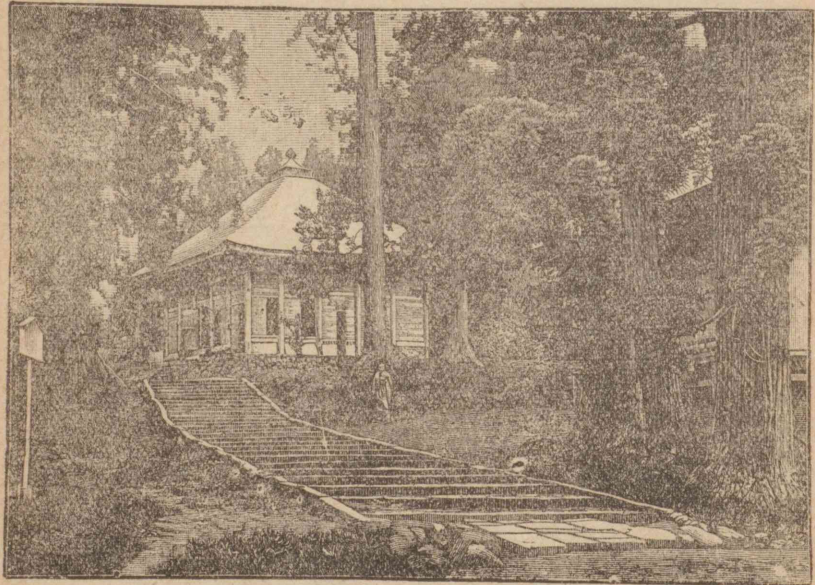
ず。終に路ふみたがへて石の巻といふ港に出づ。こがね花咲く」とよまれたる金華山海上に見わたし、



(二) 陸前國栗原郡澤邊村にありしといふ
(三) 同國志田郡古川町にあり

(三) 須賣呂伎能御代佐可延
李等阿願麻奈流美知能
クヤニカネ久夜麻爾金
花佐久
(萬葉集)

(二) 陸奥國桃生郡橋浦村にありといふ
(三) 石の巻の東にあり



金色堂

數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて竈の煙立ちつづきたり。思ひがけずかかる所にもきたれるかなと、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸く貧しき小家に一夜をあかして、明くれば又しらぬ道にまよひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧眞野の萱原などよそめにみて遙かなる堤を行く。心細き長沼にそ

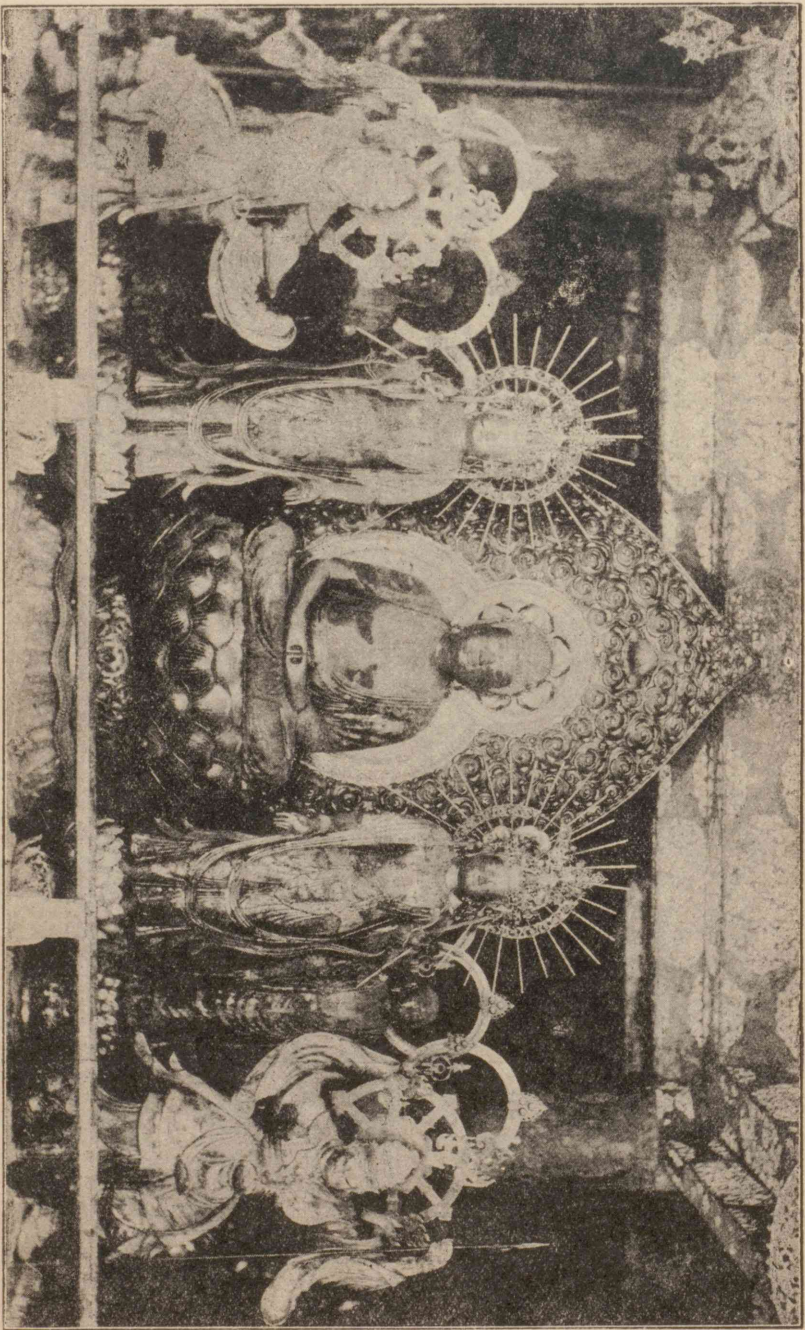
うて戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る。その間二十餘里ほどとおほゆ。

清衡、基衡
秀衡

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて金鷄山のみ形を遺す。先づ高館にのぼれり。北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔て、南部口をさし固め夷をふせぐとみえたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。『國破れて山河あり、城春にして草青みたり』と笠打ち敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡。 (芭蕉)

國破山河在
城春草木青
(杜甫)



金 色 堂 内 部

*義經の臣増
尾權頭兼房

卯の花に兼房見ゆる白毛かな。 (曾良)

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、
光堂は三代の棺を納め三尊の佛を安置す。七寶散りうせて
珠の屏風にやぶれ、金の柱雪霜に朽ちて、既に頽廢空虚の叢
となるべきを、四面あらたにかこひ藁を覆うて風雨をし
のぎ、姑く千歳の紀念となれり。

五月雨の降りのかしてや光堂。 (芭蕉 奥の細道)

一六 藤田東湖の書簡

一 兩年以來十數度の貴翰、尙又時々御惠投ものに預
り、殊に當春梅花の御贈物等實以て御厚意淺からず、僕

東湖は嘉永五年二月幽閉を解ける

藤田東湖肖像

水戸藩校徳川齊昭の創立



が頑鈍狂愚何ゆる右様御眷顧下され候や、謝する所を知らず、汗顔の至りに御座候。

さて慎中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脱し候上は、早速一書を裁し右數度の御厚意を謝し候筈の處、爾來僕が境涯實以て寸暇もこれなく、今日始めて貴答に及び候。

一 先年弘道館にて貴兄御面貌はたしかに相覚え候。謂はゆる嶄然頭角今以て心目に宛然に御座候處、追々御詩文等拜見、尙又御尊承知致候へば、近來益御研精の由、憚ながら感心仕候。老人くさき申分には候へども、御國も學校御開き以來、讀書家は澤山に相成候へども、眞實の學者は寥々に御座候間、國家のため御精勵尤に存じ候。僕などは罪名載せて幕府の籍にあり候身分にて天地の一棄人に候間、理窟がましき事は一切申すまじと心かけ候へども、放翁が申す如く「大義未だ曾て君臣を忘れ

知者樂山
知者動
知者靜
知者樂
仁者壽

東湖の眞筆

宋の陸游の號なり

智者樂山 仁者壽

東湖の眞筆

ずの至情もだし難く、且つは度々の御細書、御深意をも推察致しかたがた心事ほほ吐露仕り候。

*徳川齊昭の撰且書せるもの

申すまでもこれなく候へども、學問は實學にこれなく
ては却つて無學にも劣り申し候。弘道館記中に「忠孝無
二文武不岐學問不殊其效」と遊ばされ候儀實に學者立
志の模範、志士報國の根本に御座候はんか。今世親孝行
の様なれども御奉公は出來ぬ風の人も相見え、又御奉
公出來候様にても父子の中とくと致さざる向も相見
え候。これら決して聖人の道にあらずと存じ候。

又少々書を読み候へば何か仔細らしき顔色を致し、言
語等漢文交りにてしやらくさく候へども、劔槍等の藝
一切出來申さず、文弱白面の書生と相成り候儀、毛唐人
ならばそれにて宜しきかも相知らず候へども、かりそ

めにも神州尙武の域に生まれ、且は武家の飯を食ひ候
ものは、右様白面の書生は風上へも置きかね候事勿論
に御座候。武人の愚にも困り候へども、どちらと申し候
へば寧ろ文弱の書生にはまさり申すべきか。併し成る
べきだけは文武岐れず兼備これありたき事、是又勿論
に御座候。

學問事業その效を殊にせざるに至り候ことは中々難
物なり。僕が輩頌白に相成候へども、今以て學問事業一
致の場合に相成り申さず、及ばずながら心を用ひ候。修
己治人の工夫、明倫正名の講究、時々刻々離れ申さず候
はば、貴兄などは妙齡の御事故、必ず學問事業の一致も

予ニ遊ばる期候

御出來なされ候はん。隨分御研精御尤に御座候。

一 讀書は博きを貴び候へども、うはすべり致候うては何程萬卷を讀み候とても、用をなしかね候はんか。古人の謂ゆる「眼光紙背に透る」と申す如く讀みたき事に御座候。次第次第に後の世に生れ候ほど讀書多く相成申し候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す様に相成り、末が末に相成候はば、三十史も五十史も讀み申さず候うては相成らざる譯合故、博きを貴び候中にも、その要を得候儀肝要と存じ候。

人の持前種々これあり候故、一概には申しかね候へど

(二) 史記、前漢書、後漢書、三國志、晉書、宋書、南齊書、梁書、陳書、魏書、北齊書、周書、隋書、南史、北史、唐書、五代史、十七史に宋史、遼史、金史、元史を加ふ

* 某讀、漢書、至、是、凡、三、經、手、抄、矣、初、則、一、段、事、抄、三、字、爲、題、次、則、兩、字、今、則、一、字

も、歴史等も唯ばつと讀み候よりは、何か一つ講究著述致す心得にて讀み候方、格別に益を得候様相覺え申し候。制度の事も、兵機の事も、文辭の事も、名臣賢相の行狀其の外一々記憶致すべしと存じ候うては、大抵の人にてはなか／＼覺えかね申し候。東坡が漢書を讀み候法など面白く御座候。尙又御勸考御尤に存じ候。

一 文章は末藝に候へども、自分にて文を書き候位にこれなく候ては、經書も歴史も本當に解し申されず候間、隨分御餘力には御修行御尤に存じ候。但し近來長短句にてごまかし候詩流行致し候處、唐詩選の序にも李太白長語を用ひ候事を評して英雄人を欺くのみと申

し候。今の流行は凡庸人を欺くとも申すべく候。右の類は先々御稽古これなき方と存じ候。

一 慶元以來人物林の如く、豪傑もおひくゝに出て候處、其の中にて仁齋の學問、徂徠の文章、熊澤の經濟、新井の敏捷など皆畏るべく存じ候。併し右の内徂徠は更に名分を存ぜず、自ら東夷の人と稱し候儀不届至極に御座候。新井も才氣絶倫に候へども、東都を張り立て候志は悪むべく候。さ候へば、今に在つては右數子の長を取り、短を捨て實學講究致し、孔子の遺意に叶ひ候様御同意希望致したき事に御座候。今世の儒者やゝもすれば唐人の事は丁寧に申し、司馬溫公、朱文公、韓魏公などと

慶長元和
伊藤仁齋
秋生徂徠
熊澤蕃山
新井白石
孔子の贊に
日本國夷人
物茂卿拜手
稽首敬題と
記せり
宋の司馬光
溫公と諡せ
らる
宋の朱熹文
公と諡せら
る
宋の韓琦魏
國公に封ぜ
らる

稱へ、さて新田義貞が云々楠木正成が云々など申し候類甚だ相濟まず、右様の人をば僕は毎々和唐人と唱へ申し候。御一笑下さるべく候。その外當世の學風其弊少からず候へども、とても書中に盡しかね候ゆゑ、まづその一端を擧げ候のみに御座候。

僕は最早貴地などへ出て候事は終身これなく候間、拜面もむづかしく候處、貴兄は御墓參、御對面等にて御歸郷も御自由ゆゑ、若し來春など一寸御歸郷に相成候はば、種々存じ候だけの事は御切磋商申すべく候。

先は今日は前文御申譯旁一書を裁し候事に御座候。しかしなから御覽の通り亂筆、さぞ御讀みかねなされ候

はんと擱筆候 以上 (藤田東潤)

釋 次の語句を解釋せよ。

嶄然頭角をあらはす 大義未だ曾て君臣を忘れず

文弱白面の書生 眼光紙背に透る

一七 俚諺の内容

一國の言ひ慣れたる俚諺の内容を深く研究すれば、其の國民の歴史・氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會・制度等其の一切の生活と、其の生活の理想とに就いて發見するところ多々あるべし。此の點において、諸國民の俚諺を比較するはいと興味あることなり。

我が俚諺の中、今即座に想ひ出づるもの三四を掲げんに、

『花は櫻人は武士』といふ美しき諺は言ふも更なり、『武士は食はねど高楊枝』、『武士は相見互』といふ如きは、我が國の歴史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、又これによりてかゝる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。

『泣く子と地頭には勝たれぬ』といふを見れば、千萬言の歴史的敘述に劣らず、我が國の歴史の或時代に於ける地頭といふものゝ勢力の如何なりしかを察知し得べく、『女に家なし』、『貞女は兩夫に見えず』といふなどは、我が國に固有なる諺とはいふべからざるも、以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、よめが姑になる、『老いては子に従へ』

といへば、我が國の家族制度を示す所あり。

『さはらぬ神に崇なし』棄てる神あれば助ける神あり『神は正直の頭にやどる』鬼神に横道なし『窮した時の神だのみ』などは宗教思想を示すべく、『袖ふり合ふも他生の縁』といへば、もつて佛教によりて注入せられたる因果思想を見るに足るべし。これらは唯念頭に浮び出でたるまゝ、數例を擧げたるに過ぎず。

一國民の種々の事件に關する特殊の感想を見んには、それら事件の各を題目として、それに係はる諸種の俚諺を集め、これを比較するを要す。例へば婦女子に就いては上に擧げたる一二の例の外、女は氏なくて玉の輿に乗る『秋なすび

よめに食はすな』などの類多くあり、『男の光は七ひかり』『男は氣でもつ』など男子に關するものも寡なからざれど、女の方多く我が俚諺の題目となれるが如く、而してそれらの俚諺に現はれたる所にての女の面目は榮ありや、否や。

歐洲諸國の俚諺にも等しく見る如く、馬鹿と坊主とは多く嘲笑の題目となれり。馬鹿につける藥』は何れの國にもなかるべく、『坊主の不信心』布施ない經には袈裟をおとす』は西も東も同じ事か。

歐洲諸國の諺には夫婦の關係をいへるもの甚だ多く、我が國には寧ろ親子の關係をいへるもの多きが如し。『親の心子知らず』子を知るものは親にしくなし』子ゆゑの闇にまよ

ふ『孝行したい時に親はない』『可愛い子には旅をさせよ』『子は三界の首枷』『子が思ふよりは親は百倍も思ふ』といふなど、親の慈をいふや至れり盡くせり。その上に『子よりも孫は可愛』といへる、何の言かこれにまさりて孫の愛のこまかなることを發表するものぞ。かく親の慈愛を稱ふるものから、俚諺にまた能く人情の他面をいふ。子棄つる藪あれども身棄つる藪なし』とは、何ぞ能く吾人の主我心を謂ひ穿てるものぞ。

一般の人情に自私の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而して其の中に如何に能く普通の人情を穿てるものあるかを見

よ。『くださるものは夏も御小袖』かたきの家にても口をぬらせ』ころんでも唯は起きぬ』泣く子も目を見る』誠に然り。泣く子すら自身を護るには油断せざるなり。油断大敵』小を棄てて大に就け』長いものには巻かれよ』ふときには吞まれよ』曲らねば世に立たれず』などといふ、何れか利益の念を主とせざる。聖人は『知らざるを知らずとせよ』といひ、俚諺は『知つて知らざれ』といふ。鷹は死すとも穂をつまらず』など氣概を稱揚するもあれど、俚諺大體の教訓は、かしこかれ、損をすなといふにあり。故に『立つて居るものは親でも使へ』といふ。

俚諺は事の一面を見てこれを誇張して言ふ傾あるものから、其の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見其の判断の

諷刺

相反するが如く思はるゝものあれど、かく兩面よりいふところ能く世態人情の實相にかなひて、其の判断概ね公平なり。好きこそ物の上手なれといへど、下手の横ずきといふを忘れず、親に似ぬは鬼子といへば、形生めども心は生まざるといふ。かく事の兩面を叩いて、世相の内秘、人情の裏面を穿たんと力む。これ即ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を託きて巧みに罵倒し了するものあり。(天西祝)

一八 尺牘告白

一 尺牘

曩詣金陵欣謁

鈞顏忝蒙

優待恭領

高教五中感謝尺幅難宣敬維

玉山制臺大人鴻猷匡時

偉業濟世引瞻

鴻儀良叶頌忱茲有敝友佐野剛君品端學粹於貴國語言文字加意講求現充商業學堂教習今

值暑假之期乘便觀光

貴國若容躬謁

崇階敬聆

尺牘告白

教誨、不特伊一己之光華已也。

推解之情、實同身受。肅此敬頌。

勛祺伏祈。

鈞鑒。

(名另具)

二 告白

今有 協的門新製火油汽機。出售。凡電氣機、印書架、摺水器、小火輪船及砲臺中電燈等、所用之各汽機、向用煤斤者、今皆用火油。每日所用火油、約僅需洋五角。較之煤價爲尤賤。且其用法不必學習。無論何項工人、皆能使用。貴客如欲購取、現有式樣在豐裕洋行中。可請移玉往觀。特此佈啓。中國日本各準經理人、豐裕洋行謹白。

一九 故事熟語

權輿 濫觴 素封 杞憂 白眉 嚙矢 操觚 鉛槧
輸贏 萬乘 杜撰 膾炙 出藍 蛇足 志學 知命
耳順 古稀 阿堵物 執牛耳 避三舍 孔方兄

二〇 鉢の木 (一)

行く方定めぬ道なれば來し方も何處ならまし。

昔「これは一所不定の沙門にて候。われ、この程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、先づこの度は鎌倉に上り、春になり修行に出てばやと思ひ候」

*信濃なる淺間の嶽に立つ煙遠近人の見やほとがめぬ
(伊勢物語)

信濃なる淺間の嶽にたつ煙、遠近人の袖寒く吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ憂き世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、くだす筏の板鼻や、佐野の渡りに著きにけり。

僧「急ぎ候程に、上野の國、佐野の渡りに著きて候。あら笑止や、又雪の降り來たつて候。此の處に宿を借らばやと思ひ候。いかに此の家の内へ案内申し候」

婦「誰れにて渡り候ぞ」

僧「これは修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ」

婦「易き御事にて候へども、主の御留守にて候程に、御宿は叶ひ候まじ」

僧「さらば御歸りまで、これにて待ち申さうずるにて候」

婦「それはとにかくもにて候。わらはは外面へ出てむかひ、このよしを申さばやと思ひ候」

*陸奥國狹布の里は昔より幅狭き布を産す

夫「あゝ、降つたる雪かな。いかに世にある人のおもしろう候らん。それ雪は鷺毛に似て飛んで散亂し、人は鶴筆を著て立つて徘徊すといへり。されば今降る雪も、もと見し雪に變らねども、我は鶴筆を著て立つて徘徊すべき袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥*のけふのさむさをいかにせん。あら、おもしろからずの雪の日やな。

あら思ひよらずや、此の大雪に何とてこれにはたゝずみて御入り候ぞ」

婦「さん候。修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候程に、

御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうず
る由仰せ候程に、これまで参りて候」

夫「さて其の修行者はいづくに渡り候ぞ」

「あれに御入り候」

僧「われらが事にて候。未だ日は高く候へども、あまりの大
雪に前後を忘れて候程に、一夜の宿を御かし候へ」

夫「易き御事にて候へども、あまりに見苦しく候程に御宿
は叶ひ申すまじ」

僧「いや、見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜
を御かし候へ」

夫「留め申たくは候へども、我ら夫婦さへ住みかねたる體

にて候ほどに、なか／＼御宿は思ひもよらぬ事にて候。
これより十八町あなたに山本の里とて、よき泊りの候。
日の暮れぬ先に一足も早く御出で候へ」

僧「さては、しかと御かしあるまじいにて候か」

夫「御痛はしくは存じ候へども、御宿はまいらせがたう候」

僧「あら曲もなや、よしなき人を待ち申して候ものかな」

婦「あさましや、われ等かやうに衰ふるも前世の戒行拙き
故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ後の世
の便りともなるべけれ然るべくば、御宿を参らせたま
ひ候へ」

夫「さやうに思し召さば、何とて以前には承り候はぬぞ。

いや、此の大雪に遠くは御出て候まじ。某おつ付き留め
 申し候べし。のうく旅人、御宿參らせうのう。あまりの
 大雪に申すことも聞えぬげに候。痛はしの御有様やな。
 もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行く方を失ひ、唯一
 所にたゞずみて、袖なる雪をうち拂ひ、うち拂ひしたま
 ふけしき、古歌の心に似たるぞや。

駒とめて袖うち拂ふ蔭もなし、佐野の渡の雪の夕暮。
 かやうに詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野の渡り。
 これは東路の佐野の渡りの雪の暮に、迷ひつかれたま
 はんより、見苦しく候へど一夜は泊りたまへや」

げにこれも旅の宿、假初ながら値遇の縁、一樹の蔭のやどり

定家卿の歌
 苦しくも降
 りくる雨か
 三輪が崎さ
 ののわたり
 に家もあら
 なくに
 (萬葉集)

も此の世ならぬ契なり。それは雨の樹影、これは雪の軒ふり
 て、うきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらん。

夫「いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、參
 らせうずるものもなく候はいかに」

婦「折節これに粟の飯の候ふほどに、苦しからずば參らせ
 られ候へ」

夫「さらば其の由申し候べし。いかに申し候。御宿をば參ら
 せて候へども、何にてもまゐらせずる物もなく候。折節
 これに粟の飯のあるよし申し候。苦しからずば聞こし
 召され候へ」

婦「それこそ日本一の事にて候。たまはり候へ」

夫『のう聞こし召されうずると仰せ候。急いで参らせられ候へ』

婦『心得申し候』

夫『總じて此の粟と申すものは、いにしへ世にありしときは、歌によみ詩に作りたるをこそ承りて候に、今は此の粟をもつて身命をつなぎ候。げにや盧生が見し榮華の夢も五十年、其の邯鄲の假枕、一炊の夢のさめしも粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれや、げに、われも、うちも寝て、夢にも昔を見るならば慰むこともあるべきに、のう御覽ぜよ、かほどまで住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もすがら、寝られねば夢も見ず。なに思ひ出のあるべき』

二一 鉢の木 (三)

夫『夜の更くるにつれて次第に寒くなり候。なにをがな火に焚いてあて参らせ候べき。や、おもひ出したる事の候、鉢の木を持ちて候。これを切り火に焚いてあて申し候べし』

僧『げに、鉢の木の候よ』

夫『さん候。某世にありし時は鉢の木を好き、數多樹を集め持ちて候ひしを、斯様の體に罷りなり、いや、樹好きも無用と存じ、皆人に参らせて候。さりながら今も梅櫻、松を持ちて候。あの雪持ちたる木にて候。某が祕藏にて

候へども、今夜の御もてなしに、これを火にたき、あて申さうずるにて候』

僧『いや、これは思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう候へども、自然おこと世に出てたまはん時の御慰みにて候間、なか／＼思ひもよらず候』

夫『いや、とても此の身は埋れ木の花さく世に逢はんこと、今此の身にては逢ひがたし』

婦『ただいたづらなる鉢の木を、御身のために焚くならば』

夫『これぞ、まことに難行の法の薪とおぼしめせ』

婦『しかもこの程雪降りて』

夫『仙人につかへし雪山の薪』

埋れ木の花
さくことも
なかりしに
身のなるは
てはあはれ
なりけり
(源頼政)

婦『かくこそあらめ』

夫『われも身を捨て人のための鉢の木切るとても、よしや惜しからじ』

と、雪うち拂ひて見れば、おもしろや、いかにせん。先づ冬木より咲きそむる窓の梅の北面は雪封じて寒きにも、こと木より先づ先だてば梅を切りやそむべき。見じといふ人こそうけれ、山里の折りかけ垣の梅をだに情なしと惜しみしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや。櫻を見れば春ごとに花すこし遅ければ、此の木や詫ぶると心を盡くしそだてしに、今はわれのみわびて住む家櫻切りくべて火櫻になすぞ悲しき。

山里の折り
かけ垣の梅
の花いかな
る人の見じ
といらふん
(菅家後集)

*御垣守衛士のたく火の夜はもえて晝は消えつつものをこそおもへ
(詞花集)

夫「さて松はさしも、げに枝を矯め葉をすかして、かゝりあれと植ゑおきし其のかひ今はあらし吹く、松はもとよ
り煙にて薪となるもことわりや。切りくべて今ぞ御垣
守衛士の焚く火は御ためなり。よくよりてあたりたま
へや」

僧「近頃よき火にあたり寒さを忘れて候」

夫「御出でにより我れらも火にあたりて候」

僧「いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ承りたく

候」

夫「いや、某は名字もなきものにて候」

僧「何と仰せ候とも唯人とは見えたまはず候。自然の時の

ためにて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし」

夫「此の上は何をか包み候べき。これこそ佐野源左衛門の尉常世がなれる果てにて候」

僧「それは何とて、かやうの散々の體にはなりたまひて候ぞ」

常世「其の事にて候。一族どもに押領せられてかやうの身となりて候」

僧「のう、それは何とて鎌倉へ御のほり候ひて、其の御沙汰は候はぬぞ」

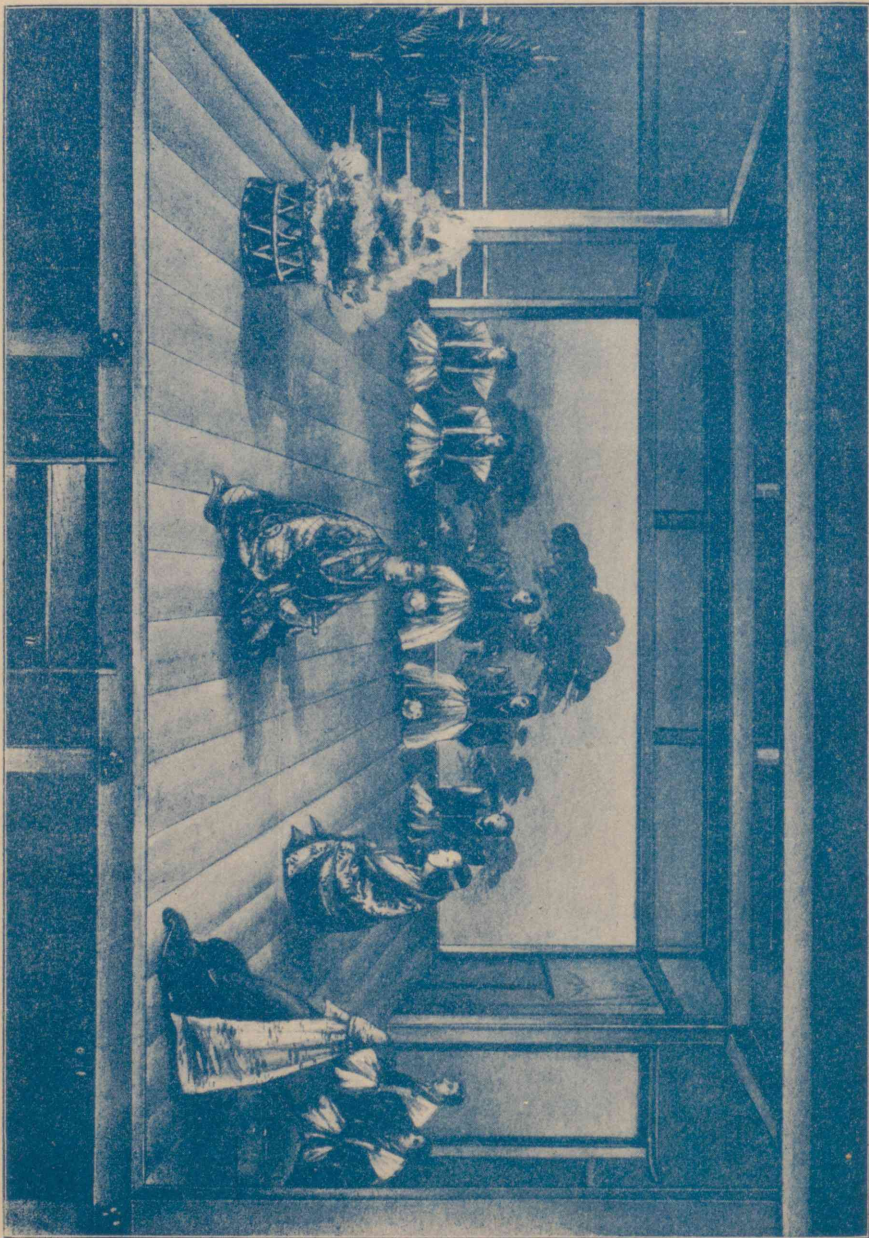
常世「運の盡くるところは、最明寺殿さへ修行に御出で候上はかやうに落ちぶれては候へども、御覽候へ、これに武

*北條時頼

具一領、長刀一枝、またあれに馬を一匹つないで持ちて候。これは、ただ今にてもあれ鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも、この具足とつて投げかけ、錆びたりとも、長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じ著到につき、さて合戦はじまらば、敵大勢ありとても一番に破つて入り、思ふ敵とより合ひ打ち合ひて、死なんこの身の此のまゝならば、いたづらに飢につかれて死なん命。なんぼう無念の事候ぞ』

僧 『よしや、身のかくては果てじ。ただ頼め、われ世の中にあらんほど、またこそまゐり候はめ、暇申して出づるなり』
常世 『名残をしの御事や。初めはつゝむわが宿のさも見苦し

*ただ頼めし
 めじが原の
 さしも草わ
 れ世の川に
 あらむかぎ
 りは
 (新古今集)



く候へど、しばしは泊りたまへや。』

僧『とまる名残のまゝならば、さて幾度か雪の日の』

二入『空さへ寒き此の暮に』

僧『いづこに宿をかりごろも』

二入『けふばかりとまりたまへや』

僧『名残は宿にとまれども暇申して』

二入『御いでか』

僧『さらばよ常世』

二入『また御入り』

僧『自然鎌倉へ御上りあらば御尋ねあれ。けうがる法師なり。かひがひしくはなけれども、披露の縁になり申さん。』

御沙汰捨てさせたまふな』

と、いひすて、出船の、ともに名残やをしむらん。

二二 鉢の木 (三)

常世 『いかにあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふは誠か。なに、おびただしう上る、さぞあるらん。東八箇國の大名、小名思ひ思ひの鎌倉入り、さぞ見事にて候ふらん。白金物うちたる絲毛の具足に金銀を延べたる太刀、刀、飼ひにかうたる馬に乗り、乗替、中間きらびやかに、打連れ打連れ、のぼる中に、常世が常にかはりたる馬、物具や打物の物、その物にあらざる氣色、さぞ笑ふらん。さりながら、所

存は誰にも劣るまじ』

と、心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや。急げども急げども、弱きに弱き柳の絲の、よれによれたる瘦馬なれば、打てども、あふれども、先へは進まぬ足弱車の乗り力なければ、追ひかけたり。

時頼 『いかに誰れかある』

耶等 『御前に候』

時頼 『國々の軍勢どもは皆々來たりてあるか』

耶等 『さん候、悉く參りて候』

時頼 『その諸軍勢の中に、いかにもちぎれたる具足を著、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者一騎

あるべし、急いでこなたに來たれと申し候へ』

郎等 『かしこまりて候。いかに誰かある』

下郎 『御前に候』

郎等 『君よりの御控には、諸軍勢の中にちぎれたる具足を著、
錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者
あるべし、急ぎ尋ねて御前へまゐれとの御事にて候』

下郎 『かしこまりて候。いかに申し候』

常世 『何事にて候ぞ』

下郎 『上意にて候ふ。急いで御前にまゐり候へ』

常世 『なに某に御前へ參れと候ふや』

下郎 『なか〜のこと』

常世 『あら、思ひよらずや。これは定めて人たがひにて候べし』

下郎 『いや〜、そなたの事にて候。その子細は諸軍勢の中に
て、いかにも見苦しき武者を連れてまゐれとの御事に
て候が、見申せばそなたほど見苦しき武者も候はぬほ
どに、さて申し候。急いで御まゐり候へ』

常世 『何と諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者にまゐれと
候ふや』

下郎 『なか〜の事』

常世 『さては某がことにて候ふべし。かしこまり候と、御申し
候へ』

下郎 『心得申し候』

常世「げに、これも心得たり。某が敵人、謀反人と申しあげ、御前へ召し出だされ頭を刎ねられたためなるべし。よしよし、それも力なし。いで、御前に參らん」

と、大床さして見渡せば、今度の早打に上り集るつはもの、きら星の如くなみ居たり。さて、御前には諸侍その外數多人なみ居つゝ、目を引き指をさし笑ひあへる其の中に、横縫のちぎれたる古腹巻に錆長刀やうゝに横たへ、わるびれたる氣色もなく參りて御前にかしこまる。

時頼「やあ、いかにあれなるは佐野源左衛門尉常世か。これこそはいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ、見忘れてあるか、いで汝佐野にて申しよな、今にてもあれ鎌倉に

御大事あるならば、ちぎれたりとも其の具足とつて投げかけ、錆びたりとも其の長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ參すべきよし申しつる。言葉のすゑをたがへずして參りたるこそ神妙なれ。先づ、今度の勢づかひ全く餘の儀にあらず、常世が言葉の末、眞か偽かを知らんためなり。又當參の人々も訴訟あらば申すべし。理非によりて其の沙汰いたすべき所なり。先づ、沙汰の初めには常世が本領佐野の莊三十餘郷返し與ふる所なり。又何よりも切なりしは大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木をきり火に焚きあてし志をばいつの世にかは忘るべき。いで其の時の鉢の木

は梅・櫻・松にてありしよな。その返報に加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、合せて三箇の莊、子々孫々に至るまで相違あらざる自筆の狀』

安堵に取り添へたびければ、常世はこれを賜りて三たび頂戴仕り。

常世『これ見たまへや人々よ、初め笑ひし輩も、これ程の御氣色さぞ羨ましかるらん』

さて國々の諸軍勢皆々御暇賜はり故郷へとてぞ歸りける。そが中に常世は喜びの眉を開きつゝ、今こそ勇め此の馬にうち乗りて、上野や佐野の船橋とりはなれし本領に安堵して歸るぞ嬉しかりける。(謡曲集)

*かみつけや
佐野の船橋
取りはなし
親はさくれ
ど我はさ
るいら
(萬葉集)

練習一、次の語句を解釋せよ。

一樹の蔭 一河の流 沙門 難行苦行

邯鄲の夢 安堵

二、左の語を口語に改めよ。

あら曲もなや なんぼう無念の事候ぞ なかくのこと

かしこまり候 あれに御入り候。

二三 歸去來辭

歸去來兮。田園將蕪。胡不歸。既自以心爲形役。奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫。知來者之可追。實迷途其未遠。覺今是而昨非。舟搖搖以輕颺。風飄飄而吹衣。問征夫以前路。恨晨光之熹微。乃瞻衡宇。載欣載奔。僮僕歡迎。稚子候門。三逕就荒。松菊猶存。携幼入室。有酒盈樽。引壺觴以自酌。眄庭柯以怡顏。倚南牕以寄傲。審容膝

之易安。園日涉以成趣。門雖設而常關。策扶老以流憩。時矯首而遐觀。雲無心而出岫。鳥倦飛而知還。景翳翳以將入。撫孤松而盤桓。歸去來。兮。請息交以絕遊。世與我以相遺。復駕言兮。焉求悅親戚之情。話樂琴書以消憂。農人告余以春及。將有事於西疇。或命巾車。或棹孤舟。既窈窕以尋壑。亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮。泉涓涓而始流。善萬物之得時。感吾生之行休。已矣乎。寓形宇內復幾時。曷不委心任去留。胡爲乎遑遑欲何之。富貴非吾願。帝鄉不可期。懷良辰以孤往。或植杖而耘耔。登東臯以舒嘯。臨清流而賦詩。聊乘化而歸盡。樂夫天命復奚疑。

(陶淵明)

二四 我が國民の天職 (一)

朝宗

現在の日本には、東西最近一百餘年間の思想さながら百川の大海に朝宗するが如く流れ入り、未だ相融會するに至らずして混沌として瀰漫せるなり。英佛獨米はいふに及ばず、世界の諸文明國の文物にして、今や何等かの形式にて我が國民の思想感情に觸れざるは稀なり。未來の日本文明を陶鑄するが爲に諸要素を取捨選擇するの便宜は優に餘りありと雖も、社會の體面よりいふときは如何にも蕪雜なりと評せざるべからず。

我が國民の或部分は、舊道德舊禮法に嫻はざると同時に、新時代の道德禮法にも外國の禮法にも嫻はざるが故に、公德私德兩つながら缺如せるが如く看做さるゝことなきに

あらず。然りと雖も、聊か自ら慰むべきは風俗習慣上の自由の歐米諸國に優り、而も之が爲に毫も社會の平和秩序を攪亂せらるゝことなく、却つて全體の進歩發達を助成しつゝある一事なり。然れば現時我が國の文化は、精神的にも物質的にも尙準備期にあり、陶鑄の最中にあり。故に我が文化は後來進歩の餘地尙甚だ大なるのみならず、其の眞價は未だ今日に於て評定すべからざるなり。

されば我が國民は、明治の初年に開國の大主旨として示し給ひたる五箇條の御誓文に「舊來ノ陋習ヲ破リ」且「智識ヲ世界ニ求メ」と宣へる金科玉條を今後も尙益服膺し、愈奮勵して一層の發展を圖り、開國有終の美を收むる一大覺悟な

かるべからず。而して之を爲すの方法は、所謂進取の政策を用ひて常に世界の文明を吸收するの一途に出でざるべからず。

唯爰に注意せざるべからざるは、外國の文明に接觸して其の善所長所に學ぶ所あるは可なりと雖も、之と同時に其の學ぶべからざる所のものを甄別し、取捨の際特に縝密の考慮を爲さんこと是なり。蓋し歐米の先進國と雖も必ずしも皆學ぶべき善所長所のみを有するにあらず、中には未だ我が國に存在せざる弊害の存するものも尠からず、若し不幸にして取捨其の宜しきを得ずんば、竟に有害無益に終るの外なければなり。例へば法律の如きも其の規定する所は

權利・義務の兩端なれども、一知半解の徒、往々此の法律に依りて極端に權利のみを主張し、義務の觀念を忘却し、或は極端なる個人主義を鼓吹し、若しくは極端なる社會主義の萌芽を我が國に移植せんとする者なきにあらず。かくの如きは予の取らざる所なり。

我が國民は古來外邦の文明を感受するの能力鋭敏なると同時に、又自國の長所を保存して失はざるの執著力あり。二千年來朝鮮・支那・印度の文明を吸収し、常に外部の感化を受けながら、世界に類例なき萬世一系の皇室を奉じて、秀美の山河と共に永遠に變らざるは、即ち新奇を好み流行を逐ひ、確乎たる操守なき輕佻浮薄なる國民にあらざるを立證

すべし。我が國民は、從來東洋の文明を保守しつゝ、西洋の文明を歓迎し、又武士道を重んずると同時に慈悲人情を貴び、毎に中庸を主とし平均を保たんことを期せり。一方に偏し極端に流れ、前を見て後を顧みず、一面を記して他面を忘るるが如きは我が歴史的な性格にあらざるなり。

故に我が國民は、保守的にして同時に進歩的なり、貴族的にして同時に平民的なり、又個人的にして同時に社會的なること、蓋し彼の^{*}アングロサクソン民族に似たる所あり。余は將來如何に困難なる社會問題若しくは重大なる國際問題起りて、今日豫想する能はざるが如き大事變に遭遇する場合ありとも、我が國民は余が此に指示したる祖先傳來の

*英國の主要なる民族なり

特長を保存し、又更に大いに之を發展し、以て綽々として其の難問題を解釋せんことを希望し、且解釋し得べきことを確信せずんばあらざるなり。

二五 我が國民の天職 (二)

此に特に注意を要すべき問題あり。他なし、我が國民が大國民の一として世界に認識せられんとするに當りて多少の障害ある事是なり。按ふに我が國民が單に東洋の一強國といふに止まらず、世界的強國民として之に適合すべき待遇を要求するは毫も異しむべきにあらず、然るに近時意外にも泰西強國民中、或は異人種なるの故を以て我が國民を

疎外せんと欲するもの無きにあらず、事の此處に至りたるには種々の内情あれども、要するに何等合理的の理由もなく、主として狹隘偏固なる人種的僻見と、下級労働者の競争とより生じたる誤解とに基因す。而して是等の誤解僻見を除去せん事は彼我國民の相互的義務なれば、我が國民は其の正當なる要求を貫徹するに苟も遲疑逡巡することあるべからず。

蓋し我が國民は、泰西諸國民に示すに足る所の光榮ある歴史を有する國民なり。現に歐米諸國に學ぶと雖も、或點に於ては既に彼に凌駕したる事實なきにあらず。例へば宗教の自由の如き、嘗て彼より學びたる事なりしが、其の實現に

至りては今や我が國却つて歐米諸國に範たるに足るものあり。又憲法の發布に就いても、歐米諸國に於ては幾度の革命を経過し、大概血を以て購ひ得たりし例なるに、我が國は和氣靄々の間に其の發布式を舉行するを得たり。斯の如く我が國民は、泰西文化の諸要素を輸入し、且之を善用し、助成する事に成功したるにあらずや。然らば今後と雖も、知識を世界に求め、更に修養を積み、我が理想の文明に達する覺悟の必要あるは言ふを俟たず。

更に約言せば、從來我が國の發達は、一に外交によりて泰西の文明に接觸したる結果なれば、我が國民が今後更に一段の進歩を企圖し、其の理想を實現せんとするに當り、愈、忘

るべからざるものは將來益、外交を盛にして、世界の平和的競争場裡に立ち、愈、泰西の文明に接觸して其の善所長所を採り、以て向上の一路に勇往邁進すべきこと是なり。我が國は既に東洋の文明を代表すべき位地に達し、更に西洋の文明を東洋に紹介するの大任を有する者なるが故に、東西兩洋の文明を融和綜合して一層世界の文明を向上せしむることは、一に其の使命なることを自信せざるべからず。

我が國民にして此の天職を理會し、此の使命を果すの覺悟あらば、其の影響は世界に波及し、國際的嫉妬の氣焰漸く熄みて、區々たる人種問題の如きは最早存在すべき餘地なきのみならず、傳説若しくは感情より來れる黨同伐異の弊

*希臘の哲學者

風はおのづから其の跡を絶ち、個々に分裂せる從來の武装的國際關係は随つて平和的となり、たとひ政治家は哲學者にして哲學者は政治家たり。」と云へるプラト^{*}ーンの理想境を實現し得ざるまでも、世界各國は國際法の下に聯合して一の系統を組織し、内外雍睦の新天地を現じ、以て文明の眞意義を發揮せんこと必ずしも夢想にあらざらん。而して斯かる重大なる使命を完うし得るもの、余は、東洋文明の代表者にして西洋文明の咀嚼者たる我が國民を措きてまた他に之あるを信ぜざるなり。(大隈重信 開國五十年史による)

實業新日本讀本 高級用卷二 終

大正三年十二月十六日印
大正三年十二月二十日發行

刷行

實業新日本讀本
定價 一、二、四、五 各金廿五錢
五、六、七、八 各金廿七錢
高級用 一、二、各金廿七錢

大正八年度臨時定價
一、二、三、四 各金參拾參錢
五、六、七、八 各金參拾五錢
上級 一、二 各金參拾五錢



著者 六盟館編輯所
發行者 合資六盟館
右代表者 杉本七百丸
印刷者 高橋郁
東京市日本橋區鐵砲町三番地
東京市京橋區弓町二十五番地

發行所

關西大販賣所

合資六盟館
東京市日本橋區鐵砲町三番地
電話 四三六四番
振替口座東京 一、二、五、五、〇番

大阪市南區心齋橋筋一丁目
電話 四三六四番
振替口座大阪 四三三番

広島大学図書

2000054284

